


STILL ALIVE
国際芸術祭
あいち2022

STILL ALIVE 今、を生き抜くアートのちから

あいち2022

記録集



P.02	ごあいさつ
P.03	開催概要
P.05	長久手市
P.13	蒲郡市
P.21	半田市
P.27	西尾市
P.37	黒田大スケ ギャラリートラック の記録
P.39	作品リスト
P.41	来場者アンケート、 メディア掲載

ごあいさつ

「あいち2022」ポップ・アップ！は国際芸術祭「あいち2022」の現代美術展参加アーティスト 82 組のうち 11 組の作品が、長久手市、蒲郡市、半田市、西尾市の文化施設を巡る小さな移動型芸術祭です。2013 年から 2019 年まで「モバイル・トリエンナーレ」という名称で親しまれた本企画は、2022 年から名称を「ポップ・アップ！」と改めてリニューアルしました。

「あいち2022」ポップ・アップ！では、「あいち2022」の参加アーティストの現代美術展とは異なる作品を紹介することで、「あいち2022」のテーマである「STILL ALIVE 今、生き抜くアートのちから」のエッセンスを別の角度から感じられる展示となったのではないのでしょうか。当展を通して、美術鑑賞が好きな方だけでなく、普段あまり現代美術に触れる機会のない方にとっても、「ここでしか見られない展示」を楽しみ、身近に感じていただく機会となったのならば、主催者としてこの上ない喜びです。

最後になりましたが、展覧会の開催にあたりご賛同いただきましたアーティストの皆様をはじめ、多大なご尽力を賜りました関係者の皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2023 年 3 月
国際芸術祭「あいち」組織委員会

あいち2022

ポップ・アップ!

参加アーティスト

遠藤薫

ENDO Kaori

小杉大介

Daisuke KOSUGI

黒田大スケ

KURODA Daisuke

升山和明

MASUYAMA Kazuaki

尾花賢一

OBANA Kenichi

カズ・オオシロ

Kaz OSHIRO

塩田千春

SHIOTA Chiharu

和合亮一

WAGO Ryoichi

渡辺篤 (アィムヒアプロジェクト)

WATANABE Atsushi (I'm here project)

イー・イラン

YEE I-Lann

横野明日香

YOKONO Asuka

ポップ・アップ!とは

ポップ・アップ!は、2013年の2回目のトリエンナーレからはじまった愛知県内の市町村を移動する「モバイル・トリエンナーレ」を前身とした、小さな移動型芸術祭です。国際芸術祭の現代美術展とは異なる作品を中心に展示するとともに、芸術祭のテーマをより県内広域に発信します。週末には学芸スタッフによるガイドツアーや、参加アーティストによるワークショップなどを行い、アート初心者でも気軽に楽しめるプログラムを展開します。



国際芸術祭「あいち2022」

「あいち2022」は、国内最大規模の国際芸術祭の一つであり、国内外から100組のアーティストが参加し、愛知芸術文化センターのほか、一宮市、常滑市、有松地区(名古屋市のまちなかを会場として広域に展開。現代美術、パフォーマンスアート、ラーニング・プログラムなど、ジャンルを横断し、最先端の芸術を「あいち」から発信。

「あいち2022」ポップ・アップ!概要

会期	延べ16日間		
会場と来場者数			
長久手市	長久手市文化の家	9月2日(金)ー4日(日)3日間	922人
蒲郡市	蒲郡市生命の海科学館	9月7日(水)ー12日(月)6日間	976人
半田市	旧中基半六邸、半田市役所	9月16日(金)ー19日(月・祝)4日間	443人
西尾市	西尾市文化会館	9月23日(金・祝)ー25日(日)3日間	690人
参加アーティスト数	11組	作品点数	20点
合計来場者数	3,031人(ワークショップ参加者を含む)		

主催 国際芸術祭「あいち」組織委員会
長久手市、蒲郡市、半田市、西尾市

過去のモバイル・トリエンナーレ開催地	2013年	豊橋市、知多市、春日井市、東栄町
	2016年	設楽町、大府市、一宮市、安城市
	2019年	設楽町、津島市、小牧市、東海市

国際芸術祭「あいち2022」

テーマ	STILL ALIVE 今、を生き抜くアートのちから
芸術監督	片岡真実(森美術館館長、国際美術館会議(CIMAM)会長)
会期	2022年7月30日(土)~10月10日(月・祝)[73日間]
主な会場	愛知芸術文化センター、一宮市、常滑市、有松地区(名古屋市のまちなかを会場として広域に展開)
主催	国際芸術祭「あいち」組織委員会

長久手市

会期:9月2日(金)～4日(日) [3日間]

時間:9:00-19:00(一部作品は22:00まで)

会場:長久手市文化の家

作品ガイドツアー:9月3日(土)11:00 / 14:00(各30分間)

ワークショップwithアーティスト(和合亮一):9月4日(日) 10:00-12:00



黒田大スケ
《寺内信一のためのプラクティス》
《寺内信一ドライブねこまんま》
《ギャラリートラック常滑》

黒田は作品を載せたトラックを街で走らせる「ギャラリートラック」シリーズの新作を制作し、当展で発表しました。8月初旬に黒田の映像作品を載せた軽トラが常滑から名古屋へ走行し、ポップ・アップ!会場にはそのときの記録映像とトラックに載せた作品、現代美術展の常滑会場で展示された映像作品、そしてトラックそのものも展示されました。詳しくはギャラリートラックの記録ページ (pp. 37-38) へ。





写真撮影：国際芸術祭「あいち」組織委員会



作品ガイドツアーの様子 写真撮影：aaak_midori (あい撮りカメラ部)



小杉大介
《異なる力点》

本作は小杉の父親が徐々に身体が動かなくなる脳疾患を患った経験に基づいて制作された映像作品です。小杉の父本人が演出に加わり、舞踏家の岩下徹が作中の父を演じています。長回しを多用し、椅子から立ち上がる、食事の用意をする、着替えるなどの日常の動作にかかる時間を、映像を通して観客に体験させることで、他者の「痛み」に寄り添わせます。

ワークショップ with アーティスト

日時:9月4日(日) 10:00-12:00 | 場所:長久手市文化の家 美術室 | 対象:中学生以上 | 参加者数:19組

和合亮一

「#愛の礫: STILL ALIVE(いまだ生きている)からはじまる言葉」



「あいち 2022」のテーマ「STILL ALIVE」は、愛知県出身のアーティスト、河原温の作品から着想しています。本ワークショップでは、言葉を表現の中心とした河原の作品から出発し、詩人・和合の詩の書き方を体験しました。参加者は和合作成のワークシートに従いながら、はじめに展示会場である文化の家の中を探索して見つけた言葉を拾い集め、次に机に向かって自ずと思ふ言葉を書き留め、それらの言葉を組み合わせて詩作に挑戦しました。最後はグループの中から一人ずつ完成した詩を朗読し、言葉の表現を通じた交流を楽しむ機会となりました。



愛知県の北西部、尾張地域東部に位置する長久手市は、羽柴軍と織田・徳川連合軍が戦った「小牧・長久手の戦い」の舞台となった歴史あるまちです。現在は名古屋や豊田市、岡崎市からリニモや愛知環状鉄道で繋がるベッドタウンとして発展しており、全国で一番住民平均年齢が若い自治体として知られています。この長久手市では総合文化施設である「長久手市文化の家」を会場としてポップ・アップ！の展示を行いました。

主な会場となった展示室では、現代アートの作品を地元で鑑賞することができるこの機会に多くの人々が作品にじっくりと見入りました。入口入ってすぐの尾花賢一《チャプター1》のテレビを見てくつろぐ覆面男が、可愛らしくもリアリティのある存在感で注目を集めていました。

文化の家の中心を通るギャラリーの真ん中には黒田大スケの「ギャラリートラック」が展示され、建物の中に軽トラックがある不思議な光景が目を引きました。トラックの荷台で展示された映像作品《寺内信一ドライブねこまんま》の、黒田大スケ扮する招き猫がねこまんまを食べる様子を、文化の家を利用する子どもから大人までが興味深げに眺めていました。

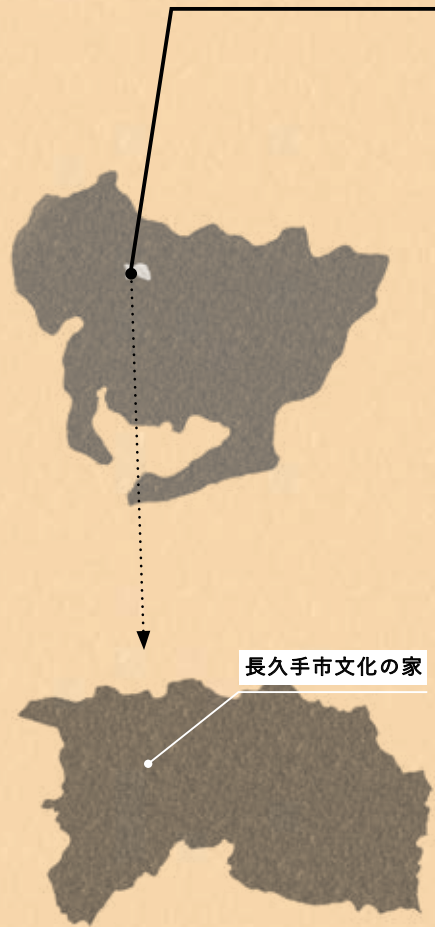
ポップ・アップ！期間中、文化の家の2階では長久手市文化の家と愛知県立芸術大学のコラボレーションによるアートショップが開かれ、アート作品を眺めながら買い物を楽しむ人たちが賑わいました。文化の家がアートに包まれた3日間となりました。(Y.T.)

長久手市文化の家

長久手市文化の家は、市内の文化活動の拠点となるべく1998年7月に開館した総合文化施設です。建築家の香山壽夫が設計したこの施設は、舞台公演から式典、集会まで幅広く対応できる可変式の「森のホール」と、シンプルでオーソドックスな形式の「風のホール」、さらに実習・練習機能や情報・交流機能を備えた芸術文化空間「アトリビング」で構成されています。数多く行ってきた自主事業の取り組みは地方自治体の文化行政における先駆けとして全国的に評価されており、人口約6.1万人の市民の文化体験の中心として機能しています。



長久手市

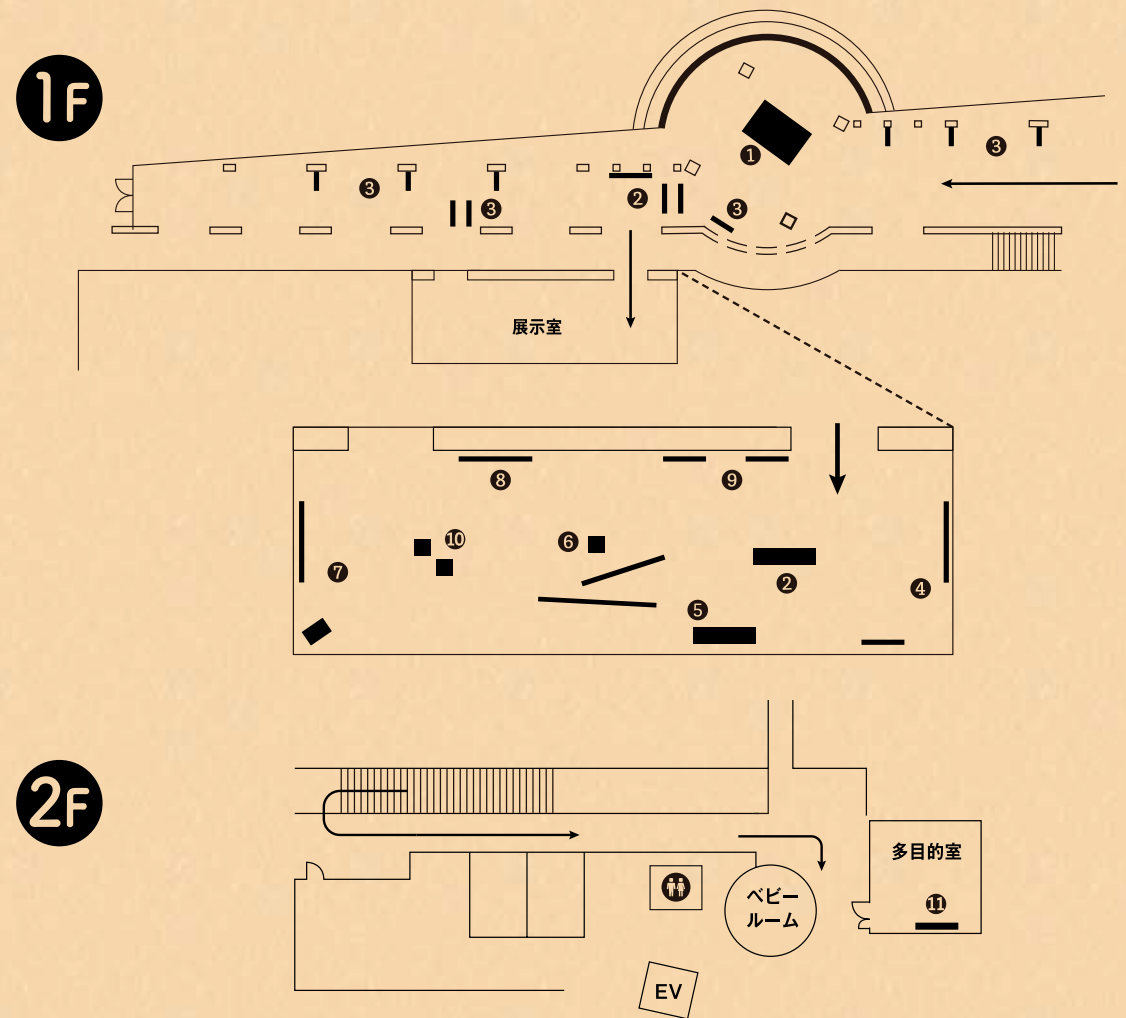


MAP 長久手市文化の家

- ① 黒田大スケ | 寺内信一のためのプラクティス | 2022
黒田大スケ | 寺内信一ドライブねこまんま | 2022
黒田大スケ | ギャラリートラック常滑 | 2022
- ② 尾花賢一 | チャプター1 | 2015
尾花賢一 | いつかある日 | 2018
- ③ 和合亮一 | 《Silver Fish》長編詩「詩の礫2022」より | 2021-2022
和合亮一 | #愛の礫 | 2022
- ④ 横野明日香 | somewhere | 2013
横野明日香 | ダム建設 | 2013
- ⑤ 遠藤薫 | 火炎瓶/ コーラ/ 沖繩/ 1945 | 2021
- ⑥ カズ・オオシロ | 無題、H鋼（2パーツ） | 2017
カズ・オオシロ | 無題、H鋼（2パーツ） | 2017
カズ・オオシロ | サン・スタジオリードアンプ II | 2021
- ⑦ 渡辺篤(アイムヒアプロジェクト)
修復のモニュメント「病院」 | 2020年
- ⑧ イー・イラン | パンキス | 2021
- ⑨ 升山和明 | SHIMIZUYA PAPER CRAFT | 制作年不明
升山和明 | SHIMIZUYA WHITE | 制作年不明
- ⑩ 塩田千春 | Cell | 2021
塩田千春 | Cell | 2021
- ⑪ 小杉大介 | 異なる力点 | 2019



提供：長久手市



蒲郡市

会期:9月7日(水)~9月12日(月) [6日間]

時間:9:00-17:00

会場:蒲郡市生命の海科学館

作品ガイドツアー:9月11日(日)10:00 / 14:00(各30分間)

ワークショップwithアーティスト(黒田大スケ):9月10日(土) 14:00-16:00



横野明日香
《somewhere》
《ダム建設》

これまで公共建築物から日用品まで、幅広いモチーフを油彩で描いてきた横野にとって、今回出品している二作で描いたダムは、学生時代から度々対象にしているモチーフです。人々の姿や営みを排除した禁欲的な構成、観ているものに没入感を感じさせる力強いストロークの曲線、制限された色彩などが、具象でありながら同時に非常に抽象的な印象を与えています。



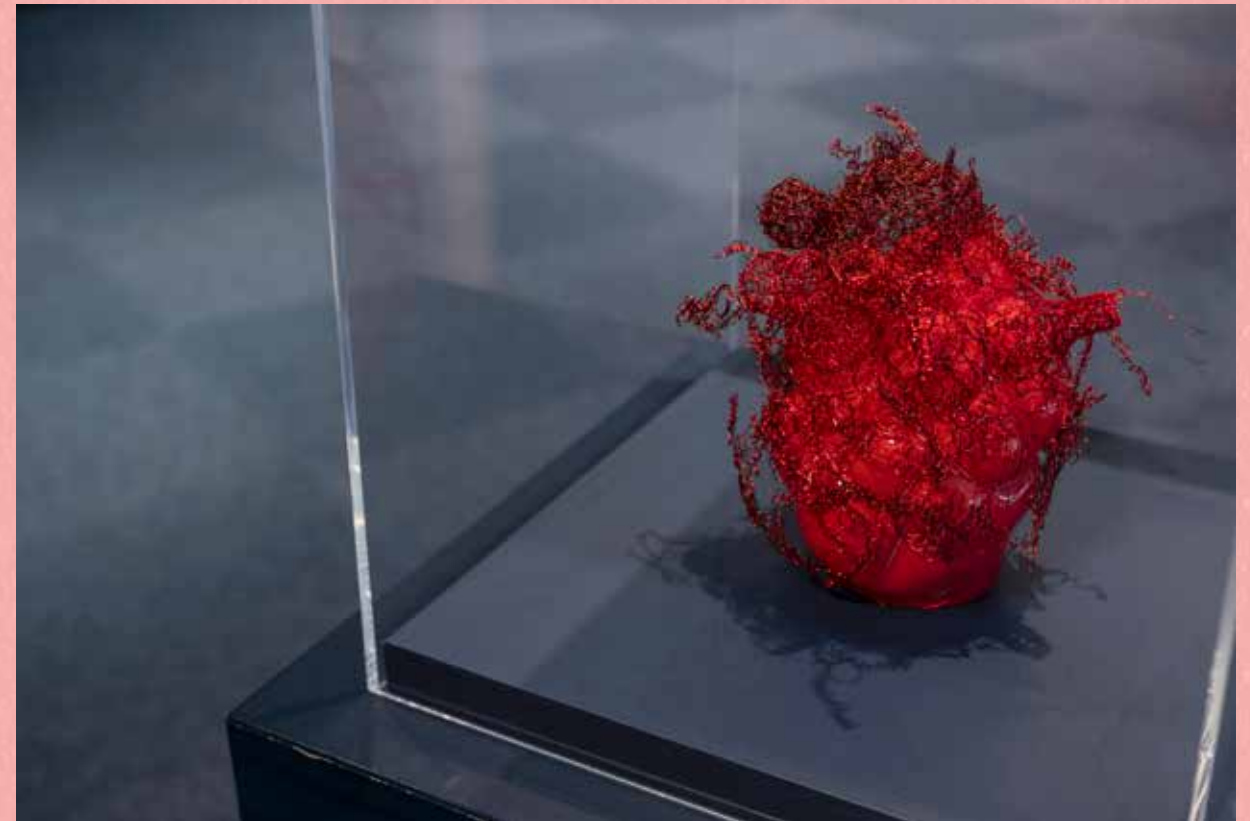
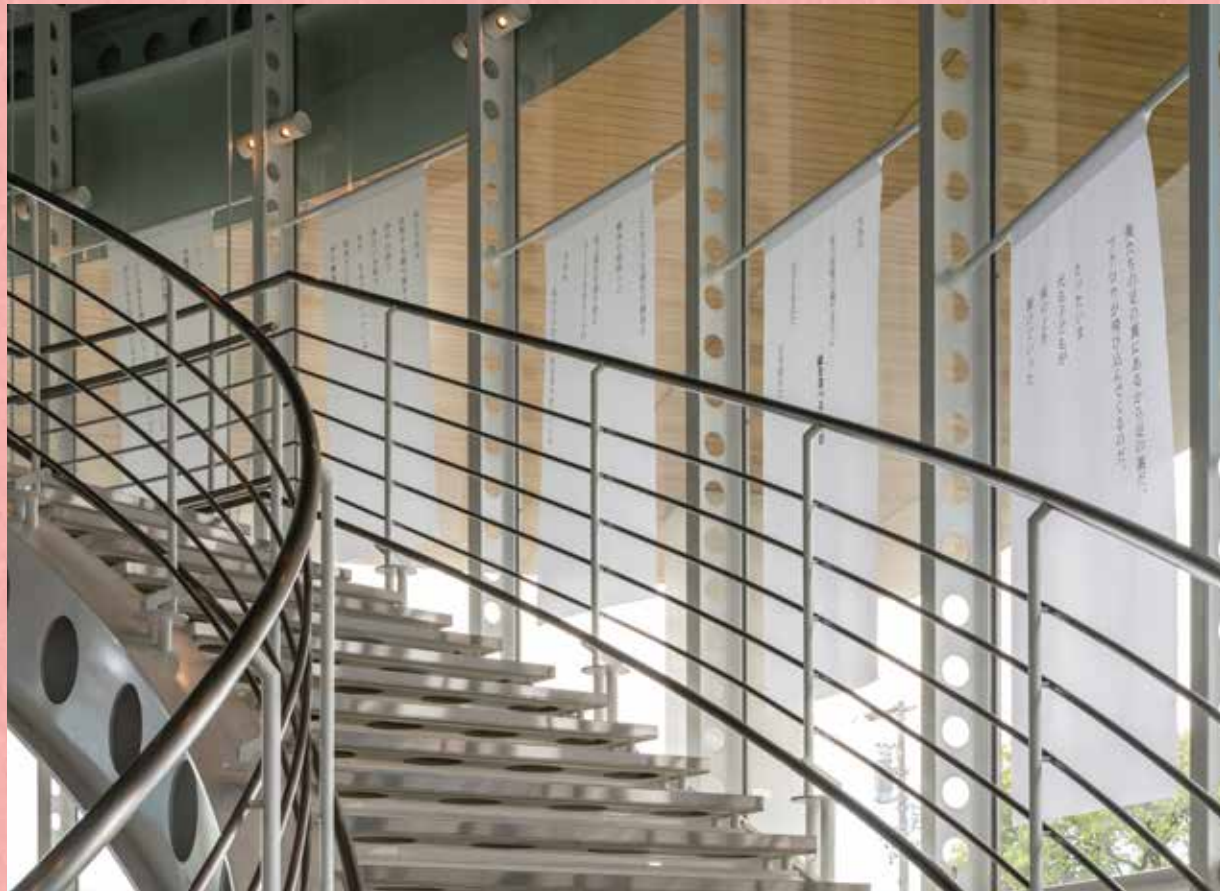
イー・イラン
《パンキス》

イランは、東南アジアの歴史を題材に、植民地主義、権力、歴史の記憶などが現代社会に与える影響に言及する作品を制作してきました。本作は、マレーシアのサバ州内陸部のムレット族の戦士が儀式や踊りに使用する大きな羽飾りがついた帽子をモチーフに、編まれた7つ頭の被り物を男性の若手のコンテンポラリー・ダンサーたちが身につけて踊る様子を、逆再生した映像です。



作品ガイドツアーの様子

写真撮影: たんたん (あい撮りカメラ部)



塩田千春
《Cell》
《Cell》

再発した卵巣癌のために抗がん剤治療を受けた塩田は、死に直面した極限状態の感情やエネルギーから、多くの作品を制作しました。ガラスや糸、針金を使ったこれら「Cell（細胞）」シリーズもそのひとつです。毛細血管のように糸や針金が絡み合うガラスは、内部にある細胞を包む膜とも、細胞に付随する不可視の魂を宿らせる器とも捉えることができるでしょう。

ワークショップ with アーティスト

日時:9月10日(土) 14:00-16:00 | 場所:蒲郡市生命の海科学館 実験工作室

対象:小学生~一般(小学3年生以下は保護者同伴) | 参加者数:7組

黒田大スケ

「心霊わしづかみ!幽霊写真術」(第1回)



普段から科学館の体験講座や実験教室が行われる「実験工作室」では、黒田大スケのワークショップを開催しました。近年幽霊をテーマに活動する黒田による心霊写真の歴史や当時の技術についての解説を参考に、参加者が実際に「心霊写真」を撮ったり、それにまつわる「怨念」の物語の創作を試みました。科学館らしく生物の標本を使用したり、建物の特徴を生かしたり、参加者が手法をこらす姿が見えました。成果発表では大人も子供も想像力を発揮し、BGMを使用したり、怪談仕立てにしたりと、パフォーマンス性の高い内容となりました。

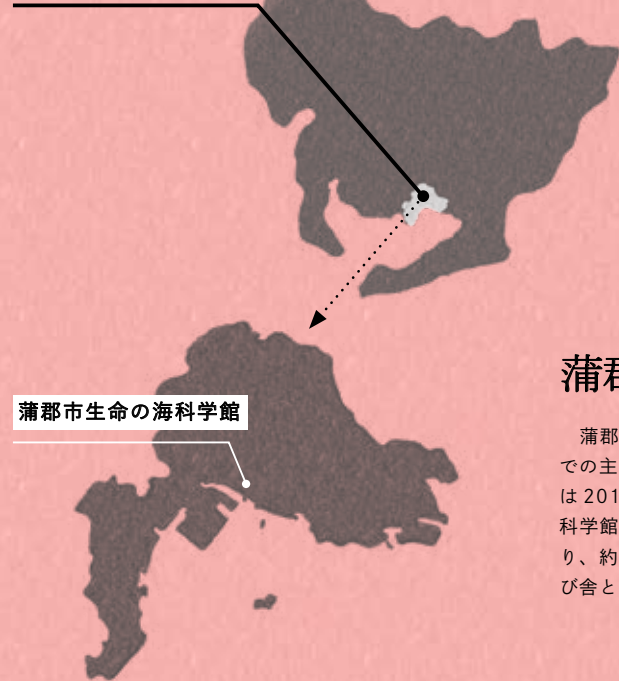


蒲郡市は三河湾に面し、西浦温泉、三谷温泉、形原温泉、蒲郡温泉の4つの温泉街を有する観光都市です。渥美半島と知多半島に囲まれるこの街は海に関する観光施設も多く、ポップ・アップ!では生命の海科学館を会場として、展示を行いました。

科学館の3階の展示室につながる企画展コーナー「科学ひろば」を、主な展示室として使用し、科学館を目的地に訪れた来場者にもポップ・アップ!を楽しんでいただきました。「生命の海」を想起させる青い展示台には、遠藤薫の琉球泡ガラスの作品《火炎瓶 / コーラ / 沖縄 / 1945》を展示し、珊瑚、貝、琉球石灰岩等を使用した本作のディテールに注目が集まっていました。

また、建物中央の吹き抜けを覗くガラス窓沿いには、病の体験をテーマに塩田千春が制作した《Cell》シリーズ2点を展示し、作品越しに見下ろすとクビナガリュウの骨格化石(レプリカ)が泳ぐように展示されています。現代アートと自然科学の領域がコラボし、作品の多彩な見方を促しました。(C.I.)

蒲郡市



蒲郡市^{いのち}生命の海科学館

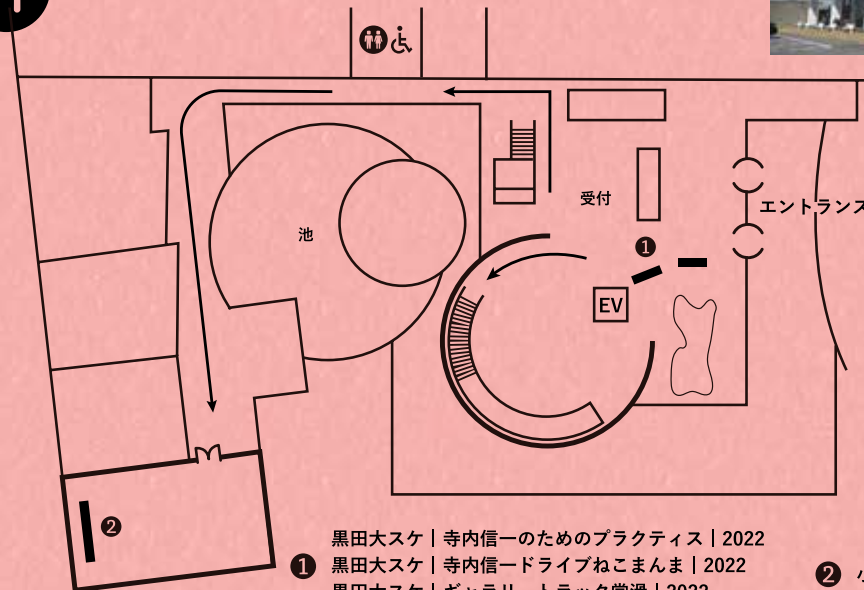
蒲郡市生命の海科学館は、地球が誕生してから人類が誕生するまでの主に海の歴史にまつわる展示を行っており、「陸のひろば」では2016年に新種記載されたインカクジラの化石が迎えてくれます。科学館では折々に様々なワークショップやイベントが開催されており、約7.9万人の蒲郡市民やこの地を訪れる観光客の自然科学の学び舎として機能しています。

MAP 蒲郡市生命の海科学館



提供：蒲郡市

1F



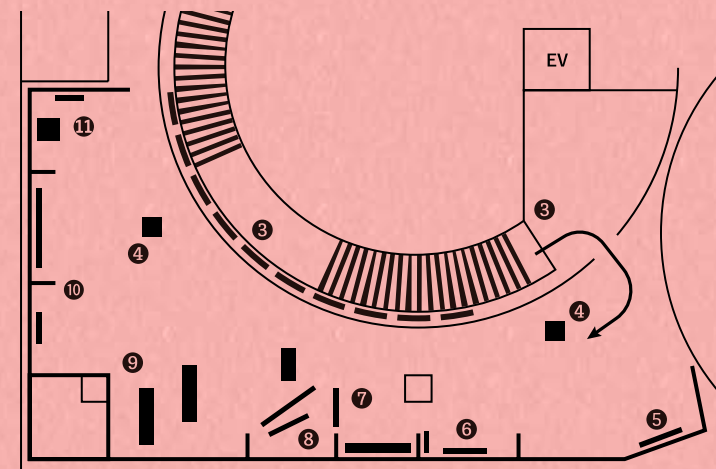
黒田大スケ | 寺内信一のためのブラクティス | 2022

① 黒田大スケ | 寺内信一ドライブねこまんま | 2022

黒田大スケ | ギャラリートラック常滑 | 2022

② 小杉大介 | 異なる力点 | 2019

3F



③ 和合亮一 | 《Silver Fish》長編詩「詩の礫2022」より | 2021-2022
和合亮一 | #愛の礫 | 2022

④ 塩田千春 | Cell | 2021
塩田千春 | Cell | 2021

⑤ イー・イラン | パンキス | 2021

⑥ 升山和明 | SHIMIZUYA PAPER CRAFT | 制作年不明
升山和明 | SHIMIZUYA WHITE | 制作年不明

⑦ 尾花賢一 | チャプター 1 | 2015
尾花賢一 | いつかくる日 | 2018

⑧ カズ・オオシロ | 無題、H鋼 (2パーツ) | 2017
カズ・オオシロ | 無題、H鋼 (2パーツ) | 2017
カズ・オオシロ | サン・スタジオリードアンプ II | 2021

⑨ 遠藤薫 | 火炎瓶 / コーラ / 沖縄 / 1945 | 2021

⑩ 横野明日香 | somewhere | 2013
横野明日香 | ダム建設 | 2013

⑪ 渡辺篤(アイムヒアプロジェクト)
修復のモニュメント「病院」 | 2020

半田市

会期:9月16日(金)~9月19日(月・祝)〔4日間〕

時間:10:00-17:00

会場:旧中笠半六邸、半田市役所

作品ガイドツアー:9月17日(土)10:00 / 14:00(各30分間)

半田市会場で9月19日に開催を予定していた黒田大スケのワークショップ「心霊わしづかみ!幽霊写真術」(第2回)は、台風の影響のため延期し、9月23日に西尾市文化会館で実施しました。(pp. 31-32参照)



カズ・オオシロ
《無題、H鋼(2パーツ)》
《無題、H鋼(2パーツ)》
《サン・スタジオリードアンプII》

年季の入ったアンプとH鋼は、一見すると何の変哲もない量産品ですが、これらは全てキャンバスに描かれたトロンプ・ルイユ(だまし絵)です。カズ・オオシロは、戦後のアメリカ絵画史を踏まえながら、遠近法や明暗で表現すべき対象を立体的に実物大で象ってしまうことで、絵画という枠組みを脱臼させています。



升山和明
《SHIMIZUYA PAPER CRAFT》
《SHIMIZUYA WHITE》

升山和明が生み出すコラージュ作品の多くは、犬山市にかつてあった「清水屋」という総合スーパーとタクシーをモチーフとしています。どうやら、滞在している福祉施設から自宅へと帰る道すがら「清水屋」を車窓から見かけたことがきっかけになっているようです。タクシーもその時に目にしたのでしょうか。



作品ガイドツアーの様子

写真撮影:竹内久生(あい撮りカメラ部)



遠藤薫
《火炎瓶 / コーラ / 沖縄 / 1945》

遠藤は、琉球ガラスのはじまりに戦後の沖縄に駐留していた米兵が捨てたコカ・コーラ瓶があったことや、1970年の「コザ暴動」でコーラの空き瓶が火炎瓶として使われたことなどを調査によって知り、現地の職人と共に本作を制作しました。工芸史だけでなく、戦争や米軍による統治、そして近年まで続く米軍駐留といった、複層的な歴史が燃り合わせられた作品です。

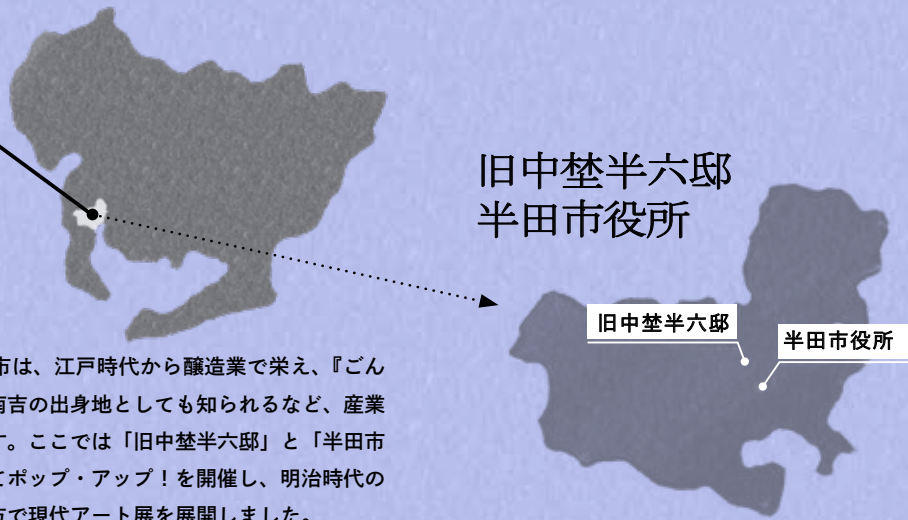


渡辺篤 (アトムプロジェクト)
《修復のモニュメント「病院」》

本作は、ひきこもりの当事者／経験者6名と共同で制作した「修復のモニュメント」シリーズのうちの1つです。各共同制作者にとって重要なモチーフをコンクリートで象ったものを、一度ハンマーで打ち壊した後、孤立・孤独に至った理由や生きづらさの事情について作家と対話しながら、陶磁器の修復技法である「金継ぎ」によって再び元の形へと戻していきます。



半田市



旧中埜半六邸 半田市役所

知多半島に位置する半田市は、江戸時代から醸造業で栄え、『ごん狐』などの著者である新美南吉の出身地としても知られるなど、産業と文芸の歴史豊かなまちです。ここでは「旧中埜半六邸」と「半田市役所」の二会場にまたがってポップ・アップ！を開催し、明治時代の邸宅と現代的な建築空間双方で現代アート展を展開しました。

半六邸の2階中心に位置する「聴松の間」では、カズ・オオシロの《無題、H鋼（2パーツ）》、《無題、H鋼（2パーツ）》、《サン・スタジオリードアンプII》を畳の上に展示し、その無機質ながら洗練された作品の特徴を引き立てました。アンプの裏の木枠を見せながら、本物のように精巧に作られたH鋼やアンプが、実はキャンバスに描かれた絵画であることがわかったと、来場者は思わず目を丸くしました。奥の「巽の間」の黒田大スケの映像作品の展示では、来場者も座ってゆったり鑑賞するなど、全体的に落ち着いた量の空間ならではの鑑賞体験になったのではないのでしょうか。

半六邸から運河を挟んで向かい側に位置する半田市役所本庁舎の入り口付近「市民情報コーナー」を明るく照らす窓には、和合亮一の《Silver Fish》から10篇の詩が掛けられました。憩いの空間に現れた和合の実験的な詩を前に、市役所を出入りする市民だけでなく市の職員の方々も足を止めて読む姿が見られました。(C.I.)

旧中埜半六邸は、地元の海運業、醸造業で著名な中埜半六家の邸宅として明治時代に建てられ、戦後は料理旅館、大相撲の力士の宿舎と変遷を経てきました。現在は修復を経て地元のNPO法人運営の下、1階は貸し店舗、2階部分は貸し部屋として利用され、当時の趣を示す外観は半田運河の醸造蔵の並ぶ景観の一角を形成しています。一方、運河を渡って東側に位置する半田市役所本庁舎は2014年竣工のモダンな建築で、人口約11.8万人の市の行政機関としてだけでなく、半田市の特産物を紹介するコーナーが設置されるなど街の魅力の発信地となっています。

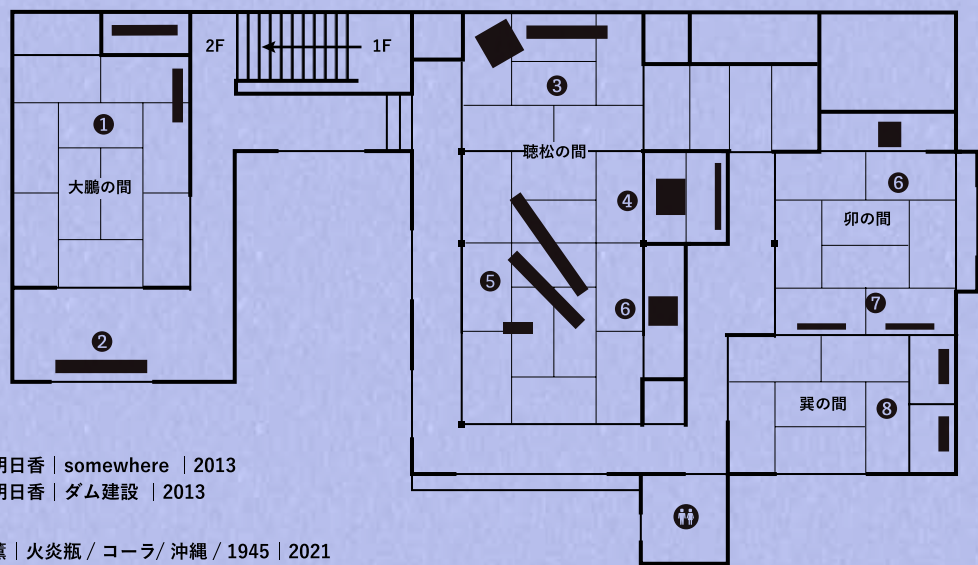


MAP

旧中埜半六邸



提供：半田市

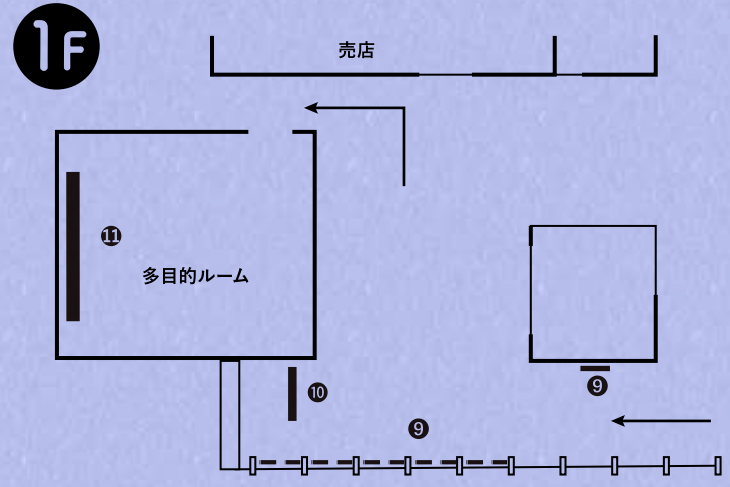


- ① 横野明日香 | somewhere | 2013
横野明日香 | ダム建設 | 2013
- ② 遠藤薫 | 火炎瓶 / コーラ / 沖縄 / 1945 | 2021
- ③ 渡辺篤(アイムヒアプロジェクト) | 修復のモニュメント「病院」 | 2020年
- ④ 尾花賢一 | チャプター1 | 2015
尾花賢一 | いつかくる日 | 2018
- ⑤ カズ・オオシロ | 無題、H鋼（2パーツ） | 2017
カズ・オオシロ | 無題、H鋼（2パーツ） | 2017
カズ・オオシロ | サン・スタジオリードアンプII | 2021
- ⑥ 塩田千春 | Cell | 2021
塩田千春 | Cell | 2021
- ⑦ 升山和明 | SHIMIZUYA WHITE | 制作年不明
升山和明 | SHIMIZUYA PAPER CRAFT | 制作年不明
- ⑧ 黒田大スケ | 寺内信一のためのブラクティス | 2022
黒田大スケ | 寺内信一ドライブねこまんま | 2022
黒田大スケ | ギャラリートラック常滑 | 2022

半田市役所



提供：半田市



- ⑨ 和合亮一 | 《Silver Fish》
長編詩「詩の礫2022」より2021-2022
和合亮一 | 《#愛の礫》 | 2022
- ⑩ イー・イラン | パンキス | 2021
- ⑪ 小杉大介 | 異なる力点 | 2019

西尾市

会期:9月23日(金・祝)～9月25日(日) [3日間]

時間:9:00-17:00

会場:西尾市文化会館

作品ガイドツアー:9月25日(日) 各日10:00 / 14:00(各30分間)

ワークショップwith アーティスト(黒田大スケ):9月23日(金・祝) 16:00-18:00

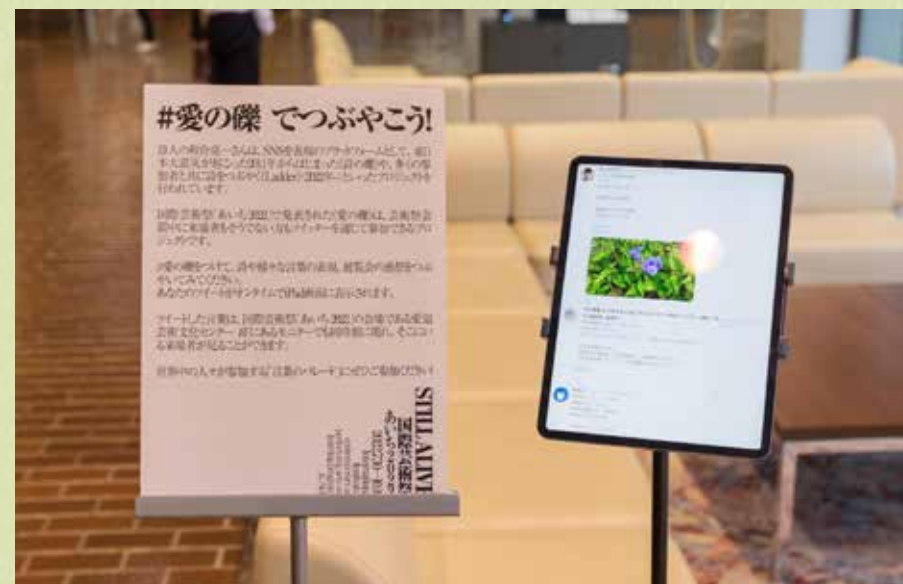
ワークショップwith アーティスト(尾花賢一):9月24日(土) 14:00-16:00



尾花賢一
《チャプター1》
《いつかくる日》

覆面男は、作家自身を象った自画像であり、また匿名の象徴としても尾花の作品内に度々登場し、ストーリーテラーのように物語を導く存在です。出品作《チャプター1》と《いつかくる日》で、尾花は覆面男に自身を取り巻く状況や気分を反映していますが、一方で都市生活への疲れや不透明な「くる日」への憂鬱など、普遍性をもつ時代の気分の表現にもなっています。





写真撮影：みずのあきひこ（あい撮りカメラ部）



和合亮一
上：《Silver Fish》
長編詩「詩の礫 2022」より
下：《#愛の礫》

《Silver Fish》は、2021年の12月25日から2022年1月27日まで、和合が毎朝机に向かって書き継いでいった詩を抜粋したものです。「言葉とは文字とは、詩を書くこととは何か」をテーマに据えながら、早朝の直感をもとに即興的に綴りました。「あいち2022」で発表したツイッターをプラットフォームとした参加型プロジェクト、《#愛の礫》の出張編も展示。「#愛の礫」をつけて詩や展覧会の感想を投稿すると、ツイートが会場に置かれた端末の画面と愛知芸術文化センター8階にあるモニターにリアルタイムで表示されました。

ワークショップ with アーティスト

半田市会場で9月19日に開催を予定していた本ワークショップは、
台風の影響のため延期し、9月23日に西尾市文化会館で実施しました。

日時:9月23日(金・祝) 16:00-18:00 | 場所:西尾市文化会館 203会議室

対象:小学生~一般(小学3年生以下は保護者同伴) | 参加者数:5組

黒田大スケ

「心霊わしづかみ!幽霊写真術」(第2回)



西尾市文化会館での展示初日である9月23日には、黒田大スケによる第2回目の「心霊わしづかみ!幽霊写真術」を開催しました。内容は第1回と同様であるものの、今回はかるとのような素材を使って物語の創作を練習するなどして工夫を凝らしました。西尾市文化会館は開館から40年以上経っており、参加者は歴史を感じさせる館内を探検しながら、それぞれの写真に捉える「怨霊」のヒントを探しました。開始時間も夕方にかけて行われたので、薄暗い空き部屋を使って撮影したり、窓を利用して亡霊のような身体の反射を捉えたりと、時間帯と建物を上手に利用した作品になりました。



「心霊わしづかみ!幽霊写真術」(第2回)の写真撮影(pp.31-32): 全てminachom(あい撮りカメラ部)

ワークショップ with アーティスト

日時:9月24日(土) 14:00-16:00 | 場所:西尾市文化会館 203会議室

対象:小・中学生(小学3年生以下は保護者同伴) | 参加者数:6組

尾花賢一

「マスクをアップデートーデコレーションマスク!!」



マスクで顔を覆った「覆面男」を自分の分身として作品制作している尾花賢一による、オリジナルマスクを作るワークショップです。「夜の世界にあらわれるマスク」「仕事/学校でつけるマスク」「知らない人と会う日につけるマスク」の3つのテーマに沿って、不織布マスクをカラフルなシール、リボン、モール、色紙などでデコレーションしていきました。物語を伝える絵本のように装飾したり、立体的な表現を試みたり、マスクの形状に囚われない自由な発想でまさに覆面のように顔全体を覆うような作品を作ったり。顔が隠れていても「自分」を表現できるようなマスクを作るよう参加者に促しました。



県中央部を北から南へ流れる矢作川流域の南端にある西尾市は、抹茶の産地として全国的に名高いまちです。江戸時代には六万石を誇った城下町でもあり、歴史公園や街並みに往時の姿が色濃く残っています。ここでは重厚な雰囲気を持つ西尾市文化会館でポップ・アップ！を開催しました。

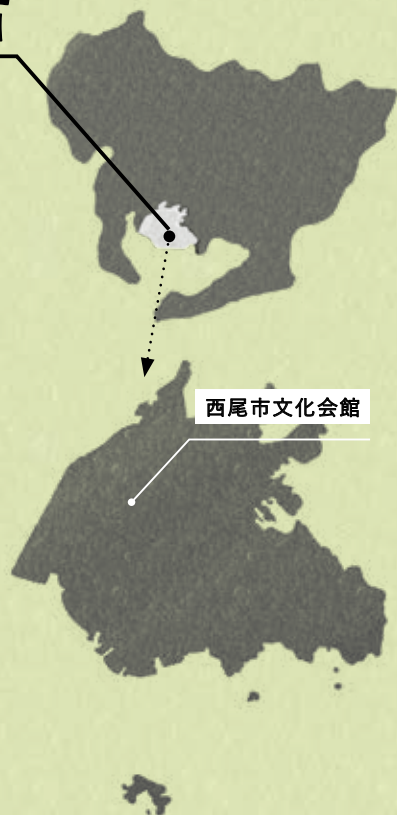
台風接近に伴い初日には市内に避難勧告が出され、文化会館周辺でも猛烈な雨が降るなど悪天候に見舞われましたが、それでも100名を超す来場者が訪れ、2日目・3日目と天気が回復するにつれより多くの方が来場しました。

最も多くの作品を展示した2階の展示室は黒を基調としたシックな雰囲気、無機質で禁欲的な印象を与える横野明日香の《somewhere》、《ダム建設》と相互に響きあい、より一層作品への没入感を強めていました。来場者は展示室奥の《修復のモニュメント「病院」》の作家・渡辺篤と共同制作者「Sさん」がコンクリートの病院を壊し修復する映像の前で立ち止まり、Sさんの病院内実習での体験談に耳を傾けていました。

ポップ・アップ！と同じ日程で「西尾市文化振興イベント2022 おと・いろ・てしごと〜めぐる、つながる〜」（西尾市主催）も開催され、西尾のまちなかで音楽やアートに触れられるイベントが数多く開催されました。このイベントの一つである「にしおまちなか芸術祭」では愛知県内で活躍するアーティストや愛知県立芸術大学の学生の作品が展示され、まちなか一帯がアートで盛り上がる週末となりました。(Y.T.)



西尾市



西尾市文化会館

西尾市文化会館

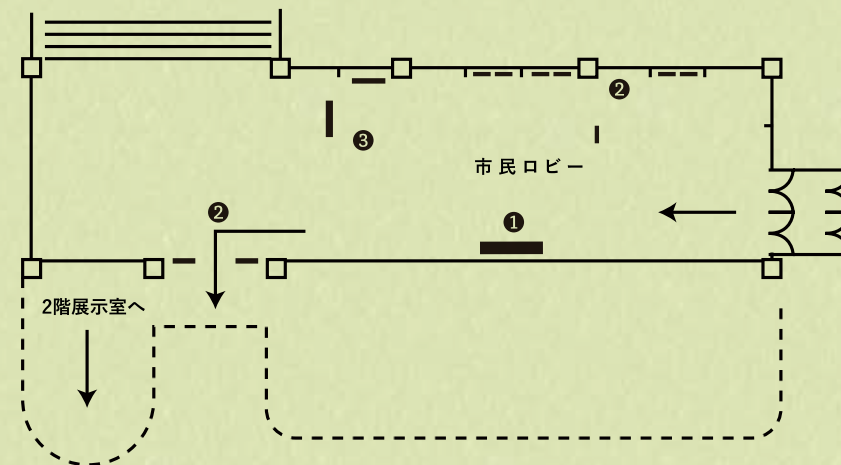
1980年に開館した西尾市文化会館は、コンサート・演劇・舞踊・発表会など多彩な催事ができる大小ホールと、会議・展示会・研修会などに適した会議室等を持つ文化施設として、人口約17.1万人の西尾市民の文化芸術活動の拠点を担ってきました。文化会館内の茶室「伝想庵」では西尾市名産のお抹茶が振舞われ、市民の憩いの場となっています。

MAP 西尾市文化会館



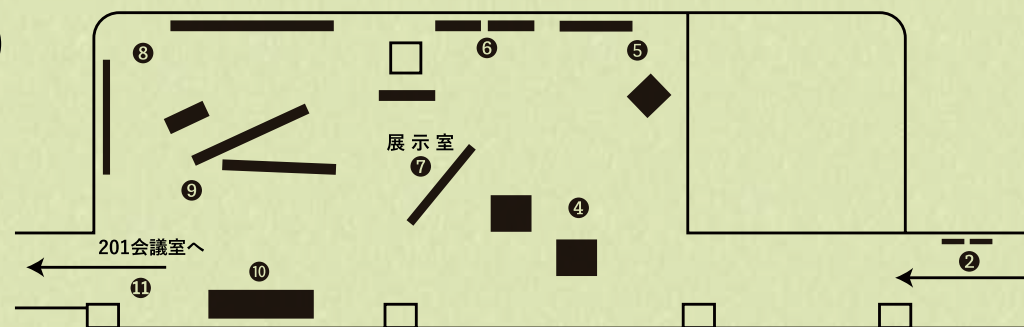
提供：西尾市

1F



- ① イー・イラン | バンキス | 2021
- ② 和合亮一 | 《Silver Fish》長編詩「詩の磔2022」より | 2021-2022
和合亮一 | #愛の磔 | 2022
- ③ 黒田大スケ | 寺内信一のためのプラクティス | 2022
黒田大スケ | 寺内信一ドライブねこまんま | 2022
黒田大スケ | ギャラリートラック常滑 | 2022

2F



- ④ 塩田千春 | Cell | 2021
塩田千春 | Cell | 2021
- ⑤ 渡辺篤(アイムヒアプロジェクト) | 修復のモニュメント「病院」 | 2020
- ⑥ 升山和明 | SHIMIZUYA PAPER CRAFT | 制作年不明
升山和明 | SHIMIZUYA WHITE | 制作年不明
- ⑦ 尾花賢一 | チャプター1 | 2015
尾花賢一 | いつかの日 | 2018
- ⑧ 横野明日香 | somewhere | 2013
横野明日香 | ダム建設 | 2013
- ⑨ カズ・オオシロ | 無題、H鋼(2パーツ) | 2017
カズ・オオシロ | 無題、H鋼(2パーツ) | 2017
カズ・オオシロ | サン・スタジオリードアンプII | 2021
- ⑩ 遠藤薫 | 火炎瓶 / コーラ / 沖繩 / 1945 | 2021
- ⑪ 小杉大介 | 異なる力点 | 2019

黒田大スケ「ギャラリートラック」の記録

ギャラリートラック撮影：前谷開 協力：本多康紀、濱本綾子

リサーチを通じて、社会のなかに佇み、忘れられ、無視された幽霊のような存在を見出し、映像やインスタレーションをつくる黒田大スケ。近年は、これまで制作の拠り所としてきた「彫刻」について研究を進め、近代以降の彫刻家やその制作行為をモチーフとしたパフォーマンス性の高いシリーズを展開しています。

2020年、コロナ禍で美術館の多くが休館する中、黒田は軽トラックに作品を載せて走行することで鑑賞を可能にする「ギャラリートラック」シリーズを開始しました。当展のために黒田は《ギャラリートラック常滑》を8月某日に決行し、常滑市から名古屋市・栄までの約40kmの道のりを軽トラの荷台に載せたモニターで映像作品を上映しながら走りました。

当展には、そのときトラックで陳列した映像《寺内信一ドライブねこまんま》と、国際芸術祭「あいち2022」の常滑会場で展示された《寺内信一のためのプラクティス》、トラック走行当日にオンラインで配信した記録映像、そして常滑から名古屋を走った軽トラそのものが出展されました。4会場を巡ったトラックは、「あいち2022」最終日に常滑・INAXライブミュージアムで開催した、黒田のイベント「ふえフェス」の際に300名超の参加者の前に現れ、有終の美を飾りました。ここでは、《ギャラリートラック常滑》実施の際の記録を中心に、展示の様子などを掲載します。



旧中笠半六郎会場風景 写真撮影：ToLoLo Studio

「ふえフェス」会場風景 写真撮影：あい撮りカメラ部

作品リスト

※アーティスト名のアルファベット順

※特に記載のないものは作家蔵

遠藤薫

《火炎瓶 / コーラ / 沖縄 / 1945》

2021

コココーラ廃瓶(1945年製を含む)、泡盛の廃瓶、首里城の灰、嘉手納米軍基地の赤土、辺野古の赤土、珊瑚、貝、琉球石灰岩、黒糖など、琉球泡ガラス

制作協力者：宙吹ガラス工房 虹(Niji/ Rainbow)

稲嶺盛吉・稲嶺盛一郎

小杉大介

《異なる力点》

2019

シングルチャンネル・ビデオ、サウンド

49分40秒

黒田大スケ

《寺内信一のためのブラクティス》

2022

シングルチャンネル・ビデオ

約 10 分

協力：チャールズ・ウォーゼン

《寺内信一ドライブねこまんま》

2022

シングルチャンネル・ビデオ

3分 20 秒

《ギャラリートラック常滑》

2022

シングルチャンネル・ビデオ、トラック

約 1 時間 37 分

升山和明

《SHIMIZUYA PAPER CRAFT》

制作年不明

協力：社会福祉法人 あいち清光会

《SHIMIZUYA WHITE》

制作年不明

協力：社会福祉法人 あいち清光会

尾花賢一

《チャプター1》

2015

ジェルトン、アクリル絵の具

《いつかくる日》

2018

インク、ワトソン紙

カズ・オオシロ

《無題、H鋼 (2パーツ)》

2017

アクリル絵具、パテ、木枠に張ったキャンバス

《無題、H鋼 (2パーツ)》

2017

アクリル絵具、パテ、木枠に張ったキャンバス

《サン・スタジオリードアンブ II》

2021

アクリル絵具、パテ、木枠に張ったキャンバス

塩田千春

《Cell》

2021

ガラス、ワイヤー

Courtesy of the artist and Kenji Taki Gallery

《Cell》

2021

ガラス、コットン、布

Courtesy of the artist and Kenji Taki Gallery

和合亮一

《Silver Fish》

長編詩「詩の磔2022」より

2021-2022

詩

Courtesy of Wago Ryoichi

《#愛の磔》

2022

詩

Courtesy of Wago Ryoichi

渡辺篤 (アイムヒアプロジェクト)

《修復のモニュメント「病院」》

2020

ビデオインスタレーション(ビデオ、コンクリートに金継ぎ、歩行器など)

9分52秒

共同制作：渡辺 篤+S氏

映像撮影補助/映像編集：檜村さくら

イー・イラン

《パンキス》

2021

シングルチャンネル・ビデオ

9分20秒

横野明日香

《somewhere》

2013

油彩、キャンバス

《ダム建設》

2013

油彩、キャンバス

来場者アンケート

来場者数 3,031 人のうち、アンケートには 464 人の方々にご協力いただきました。展示内容に関しては、「良かった」と「まあ良かった」を合わせておよそ 80% となり、多くの方から高い評価をいただきました。その理由として、「国際芸術祭『あいち 2022』のエッセンスをぎゅーっと詰め込んだ感じで入門編によかった」「国際芸術祭のテーマにある生きることの断面を切りとった作品群に多様性を感じました」といった声が寄せられ、国際芸術祭「あいち 2022」のコンセプトを感じることでできた点が多く挙げられました。

また、半田の豪商の屋敷であった旧中鉢半六邸での展示については、「場所の持つ力とうまくとけあって、とても興味深い展示でした」「建物とのコラボが面白かった」「古い建物の中に現代アートなどを置くことで、新しい発見があるなど思った」などの、建物と作品との調和を評価する回答が多くありました。

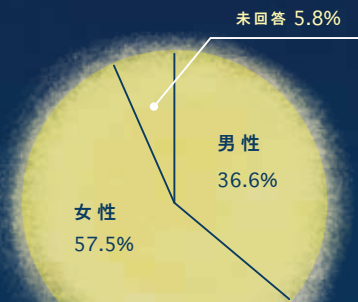
そのほか、「地元で現代美術を見る機会がなく、より身近にアートを感じられてよかった」「大きな会場より、ゆっくりじっくり見ることができてよかったです」「展示場所をまわっていただけて嬉しいです！そのおかげで子育て＆仕事のあいまに見にこれました！」といった、現代アートを身近でじっくり鑑賞することができたことを喜ぶ回答が寄せられ、芸術祭に地域的な広がりを持たせ、身近に感じてもらうという巡回展示の役割を果たすことができました。

来場者数：3,031人 回答者数：464人

【回答者の属性】

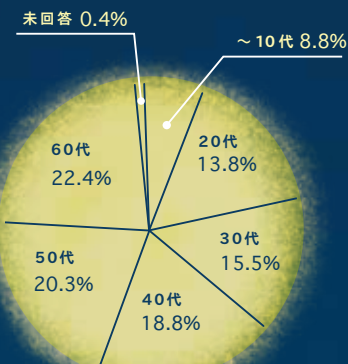
●性別

男性	170	36.6%
女性	267	57.5%
未回答	27	5.8%
計	464	100.0%



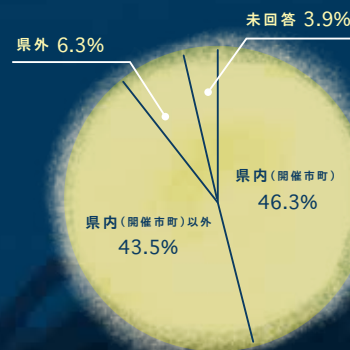
●年代

～10代	41	8.8%
20代	64	13.8%
30代	72	15.5%
40代	87	18.8%
50代	94	20.3%
60代	104	22.4%
未回答	2	0.4%
計	464	100.0%



●住まい

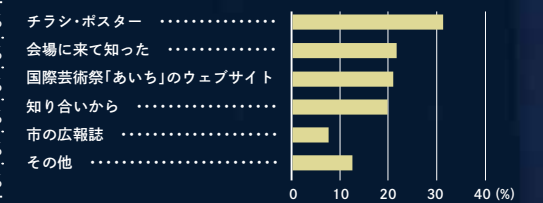
県外(開催市町)	215	46.3%
県内(開催市町以外)	202	43.5%
県外	29	6.3%
未回答	18	3.9%
計	464	100.0%



【来場理由】

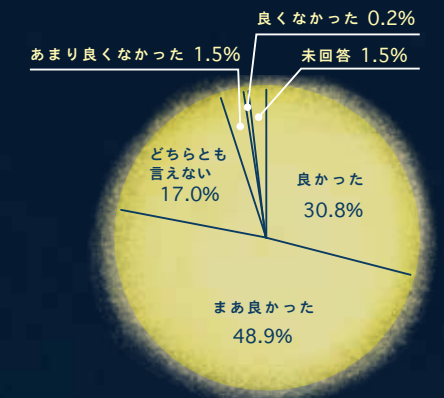
●ポップ・アップ!をどのようにお知りになりましたか(複数回答可)

チラシ・ポスター	142	30.6%
会場に来て知った	100	21.6%
国際芸術祭「あいち」のウェブサイト	99	21.3%
知り合いから	93	20.0%
市の広報誌	32	6.9%
その他	59	12.7%
計	525	-



●展示の内容はいかがでしたか

良かった	143	30.8%
まあ良かった	227	48.9%
どちらとも言えない	79	17.0%
あまり良くなかった	7	1.5%
良くなかった	1	0.2%
未回答	7	1.5%
計	464	100.0%



●本日の展示を見て、国際芸術祭「あいち2022」の本展会場(愛知芸術文化センター、一宮市、常滑市、有松地区)に行ってみようと思いましたが

思った	157	33.8%
どちらとも言えない	123	26.5%
思わなかった	52	11.2%
すでに来場したことがある	121	26.1%
未回答	11	2.4%
計	464	100.0%

メディア掲載

令和4年9月8日(木)東愛知新聞

奥深い現代美術の世界 国際芸術祭関連移動型の展示会「今を生きる」作品披露 蒲郡市生命の海科学館

令和4年9月24日(土)中日新聞知多版

国際芸術祭参加11組 西尾で明日まで巡回展 いじめと向き合った映像作品も



あなたのまちに、芸術祭がやってくる

展示期間

9月2日(金)～9月4日(日)(長久手市)
9月7日(水)～9月12日(月)(蒲郡市)
9月16日(金)～9月19日(月・祝)(半田市)
9月23日(金・祝)～9月25日(日)(西尾市)

会場

長久手市文化の家
蒲郡市生命の海科学館
旧中埜半六邸・半田市役所
西尾市文化会館

主催：国際芸術祭「あいち」組織委員会
長久手市、蒲郡市、半田市、西尾市

企画：鶴尾佳奈

制作補助：稲垣知里

広報調整：瀧澤侑加

あなたのまちに、芸術祭がやってくる

「あいち2022」ポップ・アップ！記録集

デザイン：鷺尾友公

撮影：ToLoLo studio、前谷開、あい撮りカメラ部

編集：鶴尾佳奈、稲垣知里、瀧澤侑加

発行：国際芸術祭「あいち」組織委員会

愛知県名古屋市東区東桜 1-13-2 愛知芸術文化センター内

発行日：2023年3月

部数：500部



あいち
2022



STILL ALIVE
国際芸術祭
あいち2022